「林産物の安定供給」民有林と手を取り合って

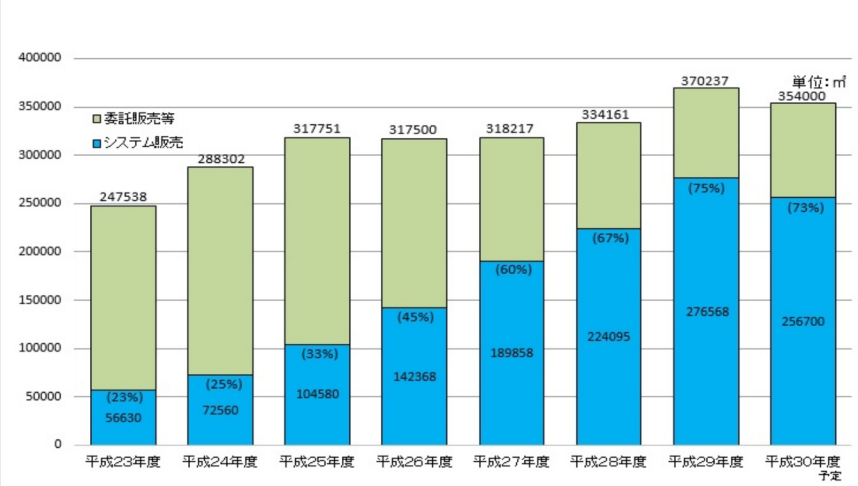
森林整備部　資源活用課

『国有林材の安定供給システム販売の推進』

国有林材の安定供給システムによる販売（以下「システム販売」という。）は、国産材の需要拡大、加工・流通の合理化等に取り組む製材工場等と協定を結び、国有林材の計画的かつ安定的な供給により、地域における国産材の安定供給体制の構築に資することを目的として推進しているところです。

システム販売は、グラフに示す青色の部分のとおり製品の販売総量に占める割合が、平成23年度の23％から平成29年度の75％（予定は70％）まで実績を伸ばしてきており、平成30年度も予定では72％を目標としています。

このシステム販売では、建築用構造材などのマテリアル的な利用や、再生可能エネルギーの固定価格買取制度（ＦＩＴ制度）の施設認定を受けたバイオマス発電施設に対する間伐等由来原木のエネルギー利用に対し、原料の安定供給に貢献しているところです。



『民有林と国有林が連携したシステム販売の推進』

民有林において施業の集約化に取り組んでいる方、国有林と森林整備協定の締結をしている方、立木販売の購入されている方など、民有林関係者を対象に、国有林と連携したシステム販売を公募により実施しています。

平成26年度より実施した取組は少しずつ拡大し、平成30年度は、ほぼ全ての森林管理署等で応募があり、25物件（前年度比+16件）の実施をする予定で取り組んでいるところです。

これまでの連携の実績から、「単独では売ることができなかった材が売れた」、「新たな取引先ができた」、「ロットの規模が大きくなったため取引価格が有利になった」等の声も寄せられており、引き続き民有林と国有林が連携したシステム販売を拡大していくこととしています。

今後は、メリットの更なる発現を期待するとともに、関係者の声にも耳を傾けながら、共に手を携えて林業の成長産業化の実現を図ることが出来れば幸いと考えています。

『採材検討会の実施』

一本の木の価値を最大限に高めるためには、需要や価格に応じた採材を理解していることが重要であり、材の曲がり等の欠点を回避しつつ、単価のより高い長級や径級の丸太に採材する必要があります。事業着手前の各署等の事業地において、請負事業体の若手オペレーター等を対象に採材検討会を開催し、市場関係者やシステム販売協定者にも参加していただいて需要動向等の説明を受けながら、採材技術の向上に取り組んでいるところです。

採材検討会（棚倉署）

『効率的な作業システムによる生産性向上』

平成28年に策定された森林・林業基本計画に定める各種目標の達成に向け、生産性の高い林業を確立することが必要です。

作業風景（プロセッサ造材）

素材生産における生産性の向上は、国有林野事業の円滑な実施につながるとともに、地域林業を支える担い手の育成、国産材の安定供給等を通じた我が国の林業の成長産業化に貢献する取組です。

国有林においても、森林管理局・森林管理署等が積極的に林業事業体の生産性向上に取り組むこととしており、受注された林業事業体の方々のご理解のもと、全ての署等で取組を進めているところです。

具体的には、森林・林業基本計画の策定の中で林政審議会で検討された10年後（平成37年度）の生産性、主伐で11～13㎥／人日、間伐で8～10㎥／人日を目標として、関係事業体と森林管理署等が協力して生産性の実態を把握し、作業工程ごとの課題や改善策等を検討し、決定された改善策を実践するもので、改善を重ねることにより生産性の向上を図ります。その結果については、参加した民有林関係者とも共有し取組の普及を図っています。

受注された事業体の方々には、作業日報に工程別の投入人数、時間、作業量（処理材積）等を記録していただくとともに、工程別の作業量と生産性の状況を毎月取りまとめ、森林管理署等に提出していただきます。森林管理署等は、事業の進捗状況等を把握しながら、適時事業体へのアドバイス等を行うこととしています。この取組をより効果的に進めていくため、事業の中間時点などには、地域の民有林関係者や関係事業者等にも参加していただいて、森林管理署等が現地検討会を開催することとしております。今後とも、林業の成長産業化に向け、民有林と国有林が一体となった取組をより一層進めていきます。

生産性向上現地検討会（会津署）

きのこ特集
間違えて食べると大変

シロマツタケモドキ（食用）（キシメジ科　キシメジ属）

九月下旬から十月中旬に赤松の混じった広葉樹林内に散生します。カサは、三cmから十cm位で、白色で鱗片があり、粘性はありません。ヒダは白色で上生し、離生することはありません。柄は五cmから十cmで白色で表面にササクレがあり、上部に膜質のツバ（内皮膜）があり、根元は細まり、外被膜はありません。

外見はドクツルタケ（猛毒菌）に類似するので、食用にする時は、注意が必要です。

ドクツルタケ（猛毒）（テングタケ科　テングタケ属）

八月下旬から十月中旬にかけて、ブナ科の樹下に単生から群生します。カサは、五cmから十二cm位で白色で湿っているとき、多少の粘性があり条線があります。ヒダは白色で離生します。柄は七cmから十五cm位で、白色でササクレがあり、下部には白色袋状のツボ（外被膜）があり、上部には白色のツバ（内皮膜）があります。学名、アマニタビローサは白い悪魔とか白い殺し屋の意味があります。

毒成分はアマニチン、ファロイジン、ビロイジンなどで食べると数時間後に発熱や腹痛がおこり、やがて各臓器や血液を破壊し、死に至ります。